マアジ　*Trachurus japonicus*

県内外を問わず、広く消費される代表的な大衆魚です。高知県では幼魚をアジゴ、アジジャコ、ゼンゴ、成魚をアジ、ヒラアジなどと呼びます。外見がマアジによく似ているマルアジは県内では一般に青アジ、同じく似ているメアジはトッパクと呼んで、マアジとは区別されます。刺身や塩焼き、揚げ物で利用されるほか、干物やすり身にも加工されます。

生物特性

マアジは日本各地の沿岸と東シナ海、朝鮮半島沿岸に分布します。高知県で漁獲されるマアジは太平洋系群に属し、東シナ海で生まれたものと太平洋沿岸で生まれたものから構成されています。1 年で尾叉長 18cm、2 年で 24cm 程度に成長します。産卵期は冬から初夏で、1 歳で 50%、2 歳ですべてが成熟します。寿命は 5 歳前後と考えられています。

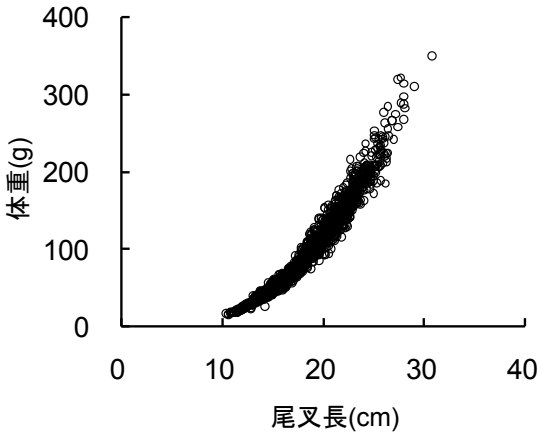

図 1　高知県産マアジの尾叉長と体重の関係（平成 17 年～22 年の測定データに基づく）.

資源動向

マアジ太平洋系群の資源量は 1990 年代にかけて増加し、平成 8 年（1996 年）には 16 万トンのピークを迎えました。しかし、その後減少傾向に転じており、平成 21 年（2009 年）の推定資源量は 6 万 8 千トンとなっています。平成 22 年度の資源評価では、水準は「中位」、動向は「減少」となっています。

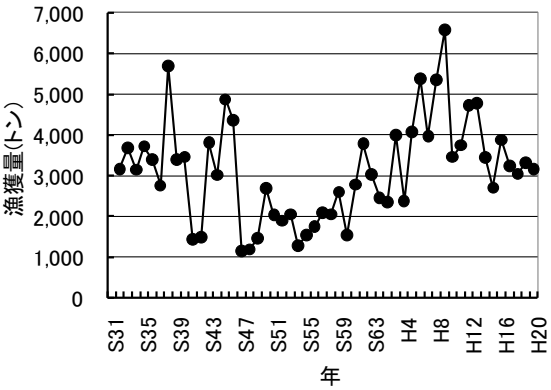

図 2　高知県下におけるマアジ漁獲量の推移.

県内の漁獲動向

高知県内におけるマアジ漁獲量は、1970 年代以降に増加し、平成 9 年（1997 年）に 6,577 トンのピークを迎えました（図 2）。その後減少傾向に転じ、平成 14 年（2002

年）以降は 3,000 トン強で推移しています。宿毛湾の中型まき網と、各地の定置網による漁獲が大半を占めています。

宿毛湾の中型まき網では、春から漁獲が本格化し、夏にピークを迎え、秋以降は減少していく傾向があります（図 3)。定置網による漁獲量は 4～5 月にピークを持ち、その後減少していく傾向があります（図 3)。

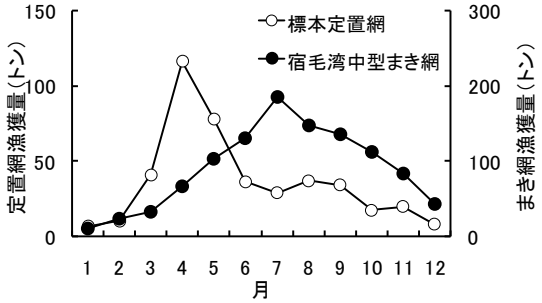

図 3 標本定置網とすくも湾の中型まき網によるマアジの月別漁獲量. 平成 11 年～平成 20 年の平均値で示す.

本県で漁獲されるマアジは０歳と１歳が大半と考えられます。宿毛湾のまき網では、ある年の下半期に漁獲されたゼンゴ銘柄の漁獲量が多いと、その翌年の上半期のゼンゴ漁獲量も多い、という関係があります。これは、マアジは定着性が強いことが原因と考えられます。また、春に加入してくるアジ仔の量を、県内各地や近県の定置網の漁況から判断できます。これらのことを総合し、半年間程度の漁況予測を行っています。

また、マアジの漁況は海況の影響を強く受けることも指摘されています。黒潮からの分枝によって暖かい水が沿岸へ波及する、いわゆる「暖水波及」があると、まき網漁場や定置網にマアジが来遊して好漁となることがあります。